

レポート

日本医師事務作業補助研究会

医師事務作業補助者の活用による 医療の質向上に期待

日本医師事務作業補助研究会東京都支部は10月11日、第3回東京地方会「医師事務作業補助者の育成と研究～医療の質向上のために～」を東京都内で開催した。

はじめに四ツ谷メディカルキューブの清水達夫常任理事が挨拶。続いて、基調講演として荻窪病院の石井康弘副院長が「現場は何を医師事務作業補助者に求めるか？」と題し、同院での医師事務作業補助者（以下、MA）が担う業務内容などを紹介した。MA導入の成果として、医師事務作業補助体制加算を算定後患者1人あたりの診療時間が20分から15分に短縮したことを挙げ、診療内容をMAが代行入力する新しい診療スタイルの有用性に期待を示した。パネルディスカッション「医師事務作業補助者の育成と研修」では、荻窪病院、東名厚木病院、武蔵野赤十字病院、神尾記念病院から6人のパネラーが自院でのMAの教育カリキュラムや習熟度評価の仕組みなどについて講演した。神尾記念病院の都築昭医事課長は、MAがカルテの代行入力を行うことで診療速度が増

し患者数が増加、結果として年間250万円増収するという成果を示した。また、医事課長の面接によりMAを5段階で評価し給与に反映するという同院の評価の仕組みを紹介し、「MAの活用には、何らかの形で働きを評価し、モチベーションを上げることが不可欠」と話した。

このほか教育セミナー「患者様と医師をつなぐ医師事務作業補助者に必要な対人スキルとアンガーマネジメント」（キャリアコンサルタント森裕美氏）、教育講演「医師事務作業所女者の医療従事者としての教育」（阿部克俊・久我山病院医局長）が行われた。

研究会には180人が参加した

